

平成 25 年度三番瀬自然環境調査（案）

1 底生生物及び底質環境調査

(1) 目的

三番瀬の底生生物（マクロベントス）の生息状態、底質及び水質環境が、過去に実施した調査（平成 5～8, 14, 18 年度）と比べて、どのように変化しているか確認する。

また、青潮もしくは淡水放流が発生した場合に、それらが三番瀬の底生生物に与える影響を調査する。

(2) 調査方法

①底質環境及びマクロベントス調査

三番瀬内 100 地点で海底の表層を採泥、うち 20 地点では底泥下層部として 10～30cm 及び 30～50cm の 2 層を採泥し、ともに底質とマクロベントスを調査する。

底質：粒度組成、酸化還元電位、強熱減量

マクロベントス：種別個体数、湿重量、貝の殻長計測

※春季の調査結果を踏まえ、青潮等の影響調査実施地点 38 地点を確定する。

②水質調査

三番瀬内外海域 11 地点で表層水（うち 4 地点は表層及び底層）を採水し、水質及び植物プランクトン・動物プランクトン（二枚貝幼生）を調査する。

水質：COD、全窒素、全リン、クロロフィル a 等

植物プランクトン：種別細胞数の計量

動物プランクトン（二枚貝幼生）：個体数、アサリ幼生の殻長組成

③干出域生物生息状況調査

春季調査の干潮時に、干出した範囲において干潟表面でみられるカニ類等の生息状況について調査する。

(3) 調査区域 別図参照

(4) 調査時期

基準調査は春(5月)、夏(8月)、秋(11月)、冬(2月)の4季を行い、青潮もしくは淡水放流があった場合は、出来るだけ早い時期に底生生物(38地点)の調査を行う。

(5) 解析・考察

底生生物(マクロベントス)の生息量、分布、貝類の殻長組成、底質環境及び水質環境が過去の調査時から変化しているかどうかを比較する。

変化が認められた場合には、その度合いを算出して変化の程度を評価し、原因を考察する。

また、青潮もしくは淡水放流が発生した場合は、直後の調査の結果から、それらが底生生物に与える影響を確認する。

2 三番瀬鳥類経年調査

(1) 目的

三番瀬海域及び周辺地域の鳥類の飛来状況を、連続して飛来数を計測することによって、より詳細に把握する。

(2) 調査方法

三番瀬及びその周辺地域4箇所を対象として、以下のとおり調査を実施する。

① ラインセンサス法

調査地点の中に定められた特定ルート上を比較的ゆっくりとした一定の速度で歩き、望遠鏡又は双眼鏡を用いてルートの両側（陸上では片側50m、干潟～海上では約1.5km～2km）を調査する。

② 定点調査法

調査範囲を広く見渡すことのできる定点から、望遠鏡又は双眼鏡を用いて可視範囲内を調査する。

なお、スズガモについては、正確な個体数を把握するため、11月から3月までの三番瀬海域3地点（船橋海浜公園、塩浜、日の出）において、同一日、同一時刻に一斉カウントを行う。

③ 観察条件の記録

調査日時、干潮・満潮時刻及び潮位、天候、気温、風向、風速の観察条件を記録する。

※ 気温、風向、風速は船橋アメダス観測データ。潮位は第三管区海上保安本部芝浦験潮所の潮汐日報をもとにA. P.（荒川工事基準面）とした表示。

④ 写真等による記録

調査区域の全容、干潮時における干潟の干出状況、観光客等の人出や船舶等鳥類の生息に影響があると思われる状況、及び、鳥類の生息状況等を写真等により記録する。

(3) 調査項目

鳥類の種別飛来数

(4) 調査場所

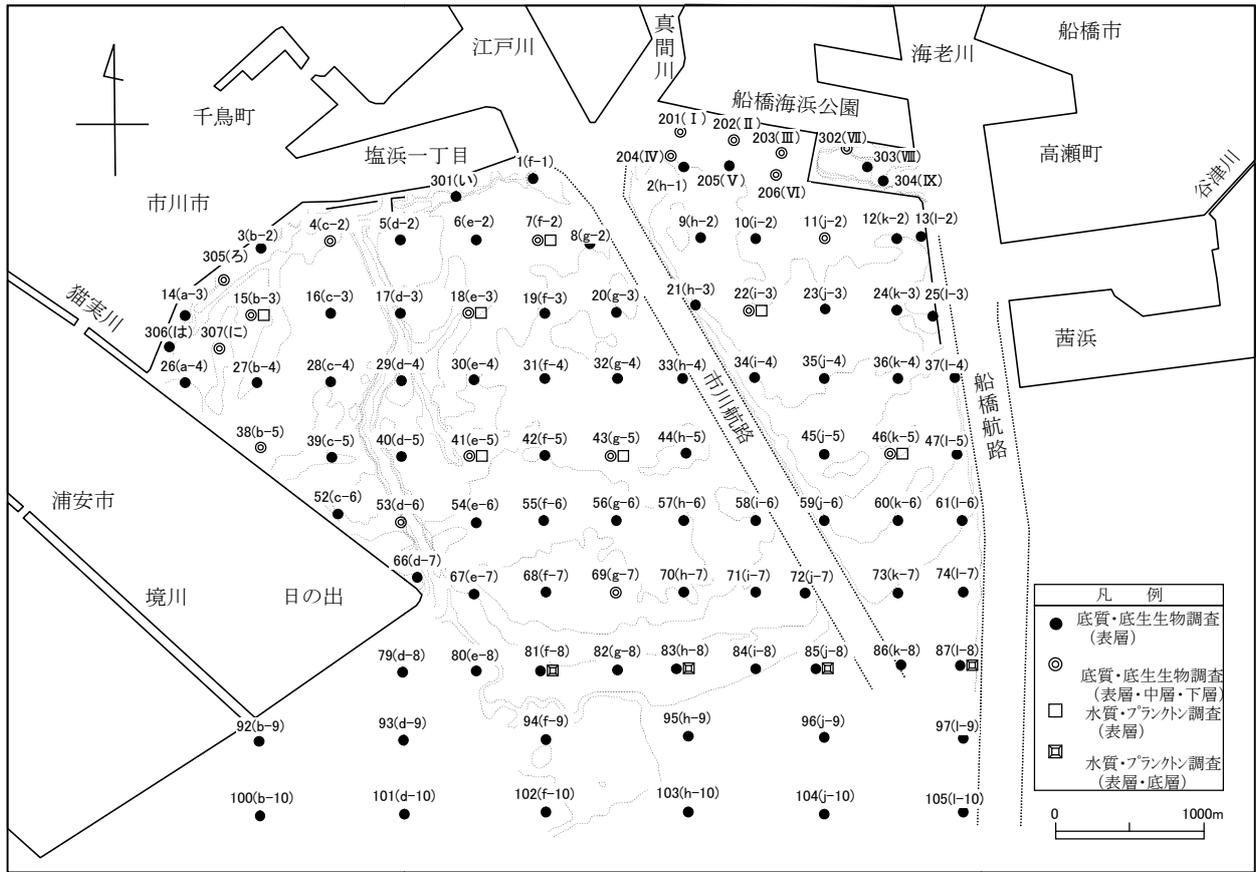
これまでの鳥類経年調査からの解析結果を考慮して、特に鳥類の利用が多く、重要と考えられる、三番瀬海域3地点（船橋海浜公園、塩浜、日の出）及び谷津干潟（別図参照）

※行徳湿地については、他の調査結果を引用する。

(5) 調査期間

平成25年4月～26年3月（月2回調査）

1 底生生物及び底質環境調査調査地点図



2 三番瀬鳥類経年調査対象区域図

